

漢字とかなとハングル<2>

ー漢字を使わない日本語をつくりだすためにー

<『むくげ通信』294号 2019.5.26より> 近藤富男

1 きっかけ (その2)

■「漢字仮名交じり文」は、ここ約100年ぐらいのあいだにつくられてきた現在の日本語になれた人にはそれで当然という感があるであろうが、本来的には不自然なものであることをつぎのふたつの文を比較することでかんがえてみてほしい。

A ある日の事^{ひ こと}でございます。御釈迦^{おしや かさま}様は極楽^{ごくらく}の蓮^{はす}池^{いけ}のふちを、独り^{ひと}でぶらぶら御歩^{おある}きになっていらっしやいました。池^{いけ}の中^{なか}に咲^さいている蓮^{はす}の花^{はな}は、みんな玉^{たま}のようにまっ白^{しろ}で、そのまん中^{なか}にある金^{きん}色^{いろ}の蕊^{ずい}からは、何^{なん}とも云^いえない好^よい匂^{にお}いが、絶間^{たえま}なくあたりへ溢^{あふ}れて居^おります。極楽^{ごくらく}は丁度^{ちやうど}朝^{あさ}なのでございましょう。(芥川龍之介『蜘蛛の糸』)

B ある day の thing ^{ひ こと}でございます。Buddha ^{ブッダ} さまは heaven ^{ヘブン} の lotus pond ^{はす いけ} のふちを、alone ^{ひとり} でぶらぶらお walking ^{あるき} になっていらっしやいました。pond ^{いけ} の inside ^{なか} に bloom ^さ いている lotus ^{はす} の flower ^{はな} は、みんな ball ^{たま} のようにまっ white ^{しろ} で、そのまん inside ^{なか} にある gold ^{ゴールド} いろの pistil ^{ずい} からは、what ^{なん} とも say ^い えない good ^よ い smell ^{におい} が、break ^{たえま} なくあたりへ full ^{あふ} れて be ^お ります。heaven ^{ヘブン} は just morning ^{ジャスト あさ} なのでございましょう。

■うえは説明する必要もないが、かなで「ひ」とうちこんで変換キーをおせば「日」に変換するようにシステムされたワープロで作成した文章。したはおなじように「ひ」とうちこんで変換キーをおせば「day」と変換するようにシステムされたワープロで作成した文章である。うえの文章も原理的・構造的にはしたの文章とおなじものといえるだろう。

■このような日本語について書家の石川九楊さんはNHK ブックス『二重言語国家・日本』のなかで「日本語は中国語の植民地語である」といつている。

■しかしながら、今の日本語からそのまま漢字をなくして、ひらがなカタカナだけにすることはできない。書家の石川九楊さんはおなじ本のなかでつぎのようにいう。

1.「漢字仮名交りの文字の国である二重言語の国・日本においては、漢字の制限は漢語の制限であり、漢語の制限は、日本語の制限であり、それは表現を著しくそこなうことと同義である。日本の文化の発展や展開を危険視する外国の植民地政策ならばともかくーむろん世界もまた共同の存在である以上、植民地政策とてありうるものではないだろうがー、日本語を扱う国語審議会が、自国語の衰退に向けて政策提言を行い、愚民政策を提言するというのは奇異なことである。助詞の「の」や「と」など辞はともかく、詞である和語もまた漢字の訓によって決定づけられ、位置を定められた言語である以上、漢字の制限は和語の衰退をももたらすという構造にある。／つまり日本語は、漢字仮名交りを基盤にする以外に方法がないのであり、…」(P191)

「日本語は文字＝中国語を媒介にして、和語と漢語が結びつけられている。つまり語彙はすべて中国語とつながりをもっている。／その日本語において、漢字の使用を制限することは思想や表現力を劣化させる。」(P210)

2.「同音異義語の多さは、次のような二つの理由によってもたらされているものである。／ひとつは、仮名文字の発明による漢語の音節読み化による平板、単純化。たとえば、英語の「International」を「インターナショナル」と仮名読み化するような形で、中国語たる漢語を日本語たる漢語に変貌させたこと。／他のひとつは、漢字依存による和語の高度化と複雑化の停滞。／たとえば糸をびんと伸ばして「張る」ことと、ポスターなどを壁に「貼る」こととは、文字によって区別されている。もしも漢字で区別することがなければ、たとえば「びんはる」とか「べたはる」と言うように語彙が枝分かれして新しい語が生れたはずである。／涙を流して「泣く」ことも、大声を上げて「哭く」ことも、「なく」で済ませ、また、ほほえむように「笑う」ことも、あざわらうように「嗤う」ことも、「わらう」で済ませることができるのも、文字に依存しているからである。この構造による和語の多義性が、同音意義語的用法を支えている。／日本語の擬音・擬態語の多

さは、おそらく文字への依存度が高まり、動詞の発達
がとめられた時代以降に肥大化したものであると考え
られる。／発達をとめられた「あるく」を「のそのそ」、
「すたすた」などが形容し、限定づけるのである。」
(P153~154)

■まとめると、

1. 漢字を制限することは漢字に裏付けられている日本語による表現をそこない、思想を劣化させる。
2. 漢字を受け入れたことにより和語の高度化・複雑化がとまった結果、多数の同音異義語・同訓異義語が生まれ、ともに漢字によるささえを必要としている。

ということになるだろう。この課題にこたえることなくしては日本語から漢字をなくせないということになるが、これはもちろん、一朝一夕になるようなことではない。2.にかかれていることは漢字をうけいれて以来 1500 年以上にもわたって日本語の世界につづけられてきたことである。

■地方によって、所属する階級によってばらばらであった日本語の文体やら書字法やらを、近代国家日本の成立以来、おおくの日本語学者に小説家、政治家までくわわって現代日本語はいまのかたちにつくりあげられたのであるが、これにも約 100 年の月日がかかっている。これをつくりなおしていくのにはこれに匹敵する時間が必要ということかもしれない。しかし、一挙にすすめることはできないにしても、目標をたててそちらにむけてすすめていくことはできるし、必要ではないか。

■そうおもったので、個人的にことしから、自分のかく文章でつぎのように実験をはじめている。

つかう漢語をできるだけすくなくし、できるだけ和語をつかって、かなでかく。

日本語をかきあらわすにあたって、ただちに漢語をゼロにすることはできない。すべてをかなでかくとすぐに、表面上つぎのような問題がでてくる。

- ① 文章がながく、まのびする。
- ② 同音異義語がおおく、文意の理解にてまどる。
- ③ ことばをかたまりとしてとらえにくく、わかちがきを必要とする(文章がさらにまのびする)。

■たとえばつぎのようである。

・食品工場は生産性向上に恒常的に取り組んでいる。(22 字)

・しょくひんこうじょうは せいさんせいこうじょうに こうじょうてきに とりくんでいる。(41 字)

■いまや、日本語ワードプロセッサの進歩はめざましく、「きしゃのきしゃがきしゃできしゃした。」を「貴社の記者が汽車で帰社した。」と一発で変換できるようになったのも、すでに 10 年ぐらいまえのはなしである。これはつまり、この程度の文であれば、機械(AI)でさえ、なかんでくる同音異義語を、かなのままであってもそれぞれ別のものであるとして理解することができるということであり、これはすなわち、AI より複雑な判断力をもった人間の脳は、文脈から同音異義語・同訓異義語を十分理解できることもしめしているとかがえられる。しかし、一瞬のおくれをきたすことがあるのもたしかであろう。また、これが理解できるのも漢字の知識があればこそであって、あらたに日本語をまなぶ漢字をしらない外国人にとって、これをみみできいて理解するのはほとんど無理というものである。

■同音異義語については、日本語が 1000 年ぐらいまえの音をのこしていたら、いまよりもすくなくったとかがえられる。それは、漢字のよみを歴史的かなづかいでかいてみればわかる。このことをかんがえはじめたきっかけはハングルでㅃ(カ p)とよむ「甲」の字は現代かなづかいでは「コウ」であるが、歴史的かなづかいでは「カフ」とかくことをしたときからである。「ㅃ」あえてカタカナでかいてみると「カッ」。「コウ」と「カッ」では関連性はみえにくい「カフ」と「カッ」なら、これはかつてほぼおなじ音だったのではないかと容易に想像できる。もとはともに中国語で、中国で発音されていたおとをまねたのであるから、当然といえば当然である。

■つまり日本語においても漢字語を歴史的かなづかいでかけば(1000 年前の日本語がもっていたおとであらわせば)同音異義語はすくなくなるのではないかとかがえ、漢字のよみを歴史的かなづかいではどうかのかしらべて、ハングル表記と比較してみた結果、つぎにまとめたように、漢字の歴史的かなづかい表記はいまよりはるかにゆたかで、ハングル表記と共通性がかなりの程度認められた。

2 漢字のハングル表記とかな表記をくらべてみる

以下の論考をすすめるにあたっては「漢字のカナ－ハングル対照表」

http://www7a.biglobe.ne.jp/~kum-kuda/kankoi/keymenu/kanjigo/kan_right90.html

からおおくのデータを借用しました。

1 閉音節(子音でおわる漢字)

(1) ㄱパッチムの漢字

■コリア語の漢字語の意味をすこしでも楽におぼえるために、日本語の漢字語とその語のハングル表記をてらしあわせていくうちに、当然であるがそこには規則性があった。規則性にすぐに気づいたのはㄱパッチムでおわる漢字である。

約束 약속 教育 교육 駅前 역전 屋上 옥상

郵便局 우체국 劇場 극장 韓国 한국

約(ヤク) 束(ソク) 育(イク) 駅(エキ)

屋(オク) 局(キョク) 劇(ゲキ) 国(コク)

【原則】終声がㄱパッチムの漢字は日本語音は基本的に「キ」または「ク」でおわる。

■終声がㄱパッチムの漢字 337 例についてしらべると、原則にただちにあてはまらないのはつぎの 13 例であるが、これらも「丑(チュウ)」をのぞく 12 例はすべて呉音、漢音に「キ」「ク」でおわる音があり、うえの原則にかなっている。

- 1 「縊死」の「縊(イ)」(액) ……音符「益」には呉音「ヤク」、漢音「エキ」の音がある。
- 2 「弾劾」の「劾(ガイ)」(핵) ……音符「亥」をもつ「核」には呉音「ギャク」、漢音「カク」の音がある。「刻」には呉音漢音ともに「コク」の音がある。
- 3 「喫茶」の「喫(キツ)」(꼭) ……呉音に「キヤク」、漢音に「ケキ」の音がある。
- 4 「脚立・行脚」の「脚(キヤ)」(각) ……呉音「カク」、漢音「キヤク」の音がある。
- 5 「格子」の「格(コウ)」(각) ……呉音「キヤク」、漢音「カク」の音がある。
- 6 「作業」の「作(サ)」(작) ……呉音、漢音ともに「サク」の音がある。
- 7 「冊子」の「冊(サツ)」(책) ……呉音「シ

ヤク」、漢音「サク」の音がある。

- 8 「刺殺」の「刺(シ)」(척) ……呉音「シヤク」、漢音「セキ」の音がある。
- 9 「蹴球」の「蹴(シュウ)」(추) ……呉音「スク」、漢音「シュク」の音がある。
- 10 「祝儀」の「祝(シュウ)」(축) ……呉音、漢音ともに「シュク」の音がある。
- 11 「丑(チュウ)」(추) ……不明
- 12 「読点」の「読(トウ)」(독) ……呉音「ドク」、漢音「トク」の音がある。
- 13 「拍子」の「拍(ヒョウ)」(박) ……呉音「ヒヤク」、漢音「ハク」の音がある。

■「丑」以外の 12 例については、うえにしるしたように本来「キ」「ク」の音をもっていて原則にそむくものはない。「丑」については日本語での使用例をみつけれられない。

■ここで、日本語では「○キ」「○ク」とかかれ、二音節になっているが、かつては「k」の子音を「キ」「ク」でかいて、これを「k」と発音していたのであるとかんがえることができる。ときとともに「キ」「ク」という文字にひきずられていまのようになったものであろう。

(2) ㄴパッチムの漢字

【原則】パッチムがㄴの漢字の日本語音は「ン」でおわる。

■これは普段につかう単語からすぐに理解できる。

安全 안전 原因 원인 運命 운명 円 원

気温 기온

安(アン) 全(ゼン) 原(ゲン) 因(イン)

運(ウン) 円(エン) 温(オン)

■ㄴパッチムの 483 例の漢字のうち、原則にあわないものはつぎの 3 例のみであるが、これもすべて呉音、漢音に「ン」でおわる音がある。

- 1 「懸念」の「懸(ケ)」(현) ……呉音「グエン」、漢音「クエン」の音がある。
- 2 「一寸の虫にも五分の魂」の「分(ブ)」(분) ……呉音「フン／ブン」、漢音「フン」の音がある。
- 3 「芸(ゲイ)」(운) ……いま日本では「ゲイ」とよみ、「藝」の略字としてつかわれているが、本来この二字は別の字である。

「藝（ゲイ）」は、①植物をうえる ②わざ、技術 ③ひとまえてえんじるための特別なわざ。

「芸」は「ウン」とよんで、①ヘンルーダというミカン科のハーブ ②（ヘンルーダを書物の除虫草としてつかったことから）書物。

■いま「ン」も一音節としてかぞえられるが、かつては「○ン(二音節)」は「○ n(一音節)」の発音であったはずである。

(3) ㄷパッチムの漢字

■【原則】パッチムがㄷ漢字の日本語音は「チ」「ツ」でおわる。

■普段よくめにする一、七、八、日曜日、結婚、決定、警察、失敗、鉛筆、出発などの漢字語をみればすぐにわかる。

一 일 칠 팔 日曜日 일요일

結婚 결혼 警察 경찰 失敗 실패

鉛筆 연필 出発 출발

一 (イチ) 七 (シチ) 八 (ハチ) 日 (ニチ)

結 (ケツ) 察 (サツ) 失 (シツ) 筆 (ヒツ)

出 (シュツ) 発 (ハツ)

■終声がㄷパッチムの漢字 169 例についてしらべてみると、この原則にあてはまらないのはつぎの 5 例のみであるが、すべて呉音、漢音に「チ」「ツ」でおわる音がある。

1 「契約」の「契(ケイ)」「계」……呉音「ケ・ケチ・セチ」、漢音「ケイ・ケツ・セツ」の音がある。なお、「契」はハングルでも「계」「글」の 2 音がある。

2 「出納」の「出(スイ)」「출」……呉音「スチ・スイ」、漢音「シュツ・スイ」の音がある。

3 「言質」の「質(チ)」「질」……呉音「シチ・チ」、漢音「シツ・チ」の音がある。

4 「不可能」の「不(フ)」「불」……呉音「フ・ホチ」、漢音「フウ・フツ」の音がある。なお、「不」はハングルでも「부」「불」の 2 音がある。

5 「相殺」の「殺(サイ)」「쇄/살」…呉音「説・セチ」漢音「サツ」がある。

ここでもすべて原則にそっているが、「○ㄷ(一音節)」が「○チ(二音節)」「○ツ(二音節)」音にかわった理由はいまわかっていない。

(4) ㄹパッチムの漢字

【原則】パッチムがㄹの漢字の日本古典語音表記は「ム」でおわる。

■日本の漢字音で「ン」でおわるもののうちㄹパッチムではなく、ㄹパッチムのものが 131 例ある。

■「南」を「ナ」とよむことはあるが、これも基本音は「ナン」で、これもふくめてすべてが呉音でも漢音でも「ム」でおわる。みごとにない例外がない。現代かなづかいでみてわからない漢字について、歴史的かなづかいでみればその音の関連性がみえる。

■これは、これらの漢字が日本語においてもある時期までは「m」でおわる閉音節の音をもっていたが、歴史のなかで「ン」の発音と区別しなくなり、それにしがつて表記も「ん」にかわったものとかんがえられる。現代の語ではあるが、無理に表記してみるとつぎのようになる。

1 「暗記(ア m キ)」 암기 (ア m ギ)

2 「飲料水(イ m リョウスイ)」 음료수 (ウ m ニョス)

3 「食塩(ショクエ m)」 식염 (シギョ m)

4 「音楽(オ m ガク)」 음악 (ウ ma ク)

5 「感動(カ m ドウ)」 감동 (カ m ドン)

暗 (オム・アム→アン)、

飲 (オム・イム→イン)、

塩 (エム・エム→エン)

音 (オム→オン・イム→イン)

したがって、このグループにも原則にそむくものはない。

(5) ㅂパッチムの漢字

【原則】パッチムがㅂの漢字の日本古典語音表記は「フ」でおわる。

■先述したことであるが、いつだったか、「六甲山」をハングルでどうかかしらべて、「육갑산 (ユッカサン)」となるということをした。その後、ふとしたときに「甲」は歴史的かなづかいでは「カフ」となることをしり、おおげさではあるが、からだかふるえた。「コウ」と「갑 (カッ)」では関連性がかんじられないが、「カフ」と「갑 (カッ)」なら、あきらかに関連性がみえる。前述のㄹパッチムの日本語漢字音とともにある時期まで「コウ」ではなく、

「カ p」という閉音節の音をもっていたとかがえられる。つまり「p」の音を「フ」で表記していたのであろう。ときとともに、「フ」が「ウ」となり、「p」音はきえてしまった。本来言語において音をかきあらわすのが文字だということからすると、文字にひきずられて音が変化するという本末転倒なことがおこったということになる。

総合 종합 中級 중급 農業 농업 拾 십
練習 연습 答 답 葉書 엽서

■**ロパッチムの漢字は 77 例あり、すべて呉音、漢音が「○フ」と表記される。**このうち、日本語音が「ツ」でおわるものがある。(3)でのべたように「ツ」でおわる漢字のパッチムはㄷのはずだが、とおもいながらこれらの漢字のよみを漢和辞典で調べてみると

- 1 「圧力」の「圧 (アツ)」……………呉音「ヨウ (エフ)」、漢音「オウ (アフ)」の音がある。
- 2 「合戦」の「合 (カッ)」・「合算」の「合 (ガッ)」……………呉音「ゴウ (ゴフ) / コウ (コフ)」、漢音「コウ (カフ)」の音がある。
- 3 「雑文」の「雑 (ザツ)」……………呉音「ゾウ (ゾフ)」、漢音「ソウ (サフ)」の音がある。
- 4 「湿度」の「湿 (シツ)」……………呉音、漢音ともに「シュウ (シフ)」の音がある。
- 5 「執事」の「執 (シツ)」……………呉音、漢音ともに「シュウ (シフ)」の音がある。
- 6 「十把一絡げ」の「十 (ジッ)」……………呉音「ジュウ (ジフ)」、漢音「シュウ (シフ)」の音がある。
- 7 「摂取」の「摂 (セツ)」……………呉音、漢音ともに「ショウ (セフ)」の音がある。
- 8 「直接」の「接 (セツ)」……………呉音、漢音ともに「ショウ (セフ)」の音がある。
- 9 「蟄居」の「蟄 (チッ)」……………呉音「ジュウ (チフ)」、漢音「チュウ (チフ)」の音がある。
- 10 「納得」の「納 (ナッ)」……………呉音「ノウ (ナフ)」、漢音「ドウ (ダフ)」の音がある。
- 11 「御法度」の「法 (ハッ)」、法身 (ホッシン) の「法 (ホッ)」……………呉音「ハウ (ホフ)」、漢音「ハウ (ハフ)」の音がある。
- 12 「拉致 (ラッチ・ラチ)」の「ラッ」……………呉音「ロウ (ロフ)」、漢音「ロウ (ラフ)」の音がある。

13 「市立」の「立 (リッ)」……………呉音、漢音ともに「リュウ (リフ)」の音がある。

■なんと、慣用音、常用音以外に「ツ」でおわる音がない。「圧」「湿」「接」…は「アツ」「シツ」「セツ」…のよみのほうが特別で、本来のこれらの漢字の音は「アフ」「シフ」「セフ」…であるということである。

14 「甲板」の「甲 (カン)」……………呉音「キョウ (ケフ)」、漢音「コウ (カフ)」の音がある。
ここにも原則にはずれるものはない。

(6) ○パッチムの漢字

【原則】○パッチムの漢字の日本古典語音表記は「ウ」でおわる。

■○パッチムの漢字は多く、548 例もある。以前は○パッチムの漢字の日本語音は「イ」または「ウ」でおわるとだけかんがえていたのだが、歴史的かなづかいに着目してみると、○パッチムの漢字の日本語音は基本「ウ」でおわることがわかった。現在「イ」でおわる漢字も歴史的かなづかいをみると、漢音が「イ」でおわるだけで、呉音はすべて「ウ」でおわるのである。かつての日本語で、はなにかかったような〔ng〕の音を「ウ」であらわしていたとかがえられる。のちに、「ウ」のもじにつられて〔ng〕が単なる「ウ」音にかわり、その結果 2 音節となったのであろう。ここでも音が文字にひきずられるという本末転倒なことがおこったということである。

■このようなことがおこるのは、かな文字が音節文字であることによる。コリアとことなり、はやくにかな文字を発明したことで漢語のよみをかなでかくようになり、のちに音が文字にひきずられて本来の音をうしなってしまうという、ことばの原則からはありえないことがおこり、「中国語たる漢語を日本語たる漢語に変貌させた(石川九楊・前掲書)」のである。

■カナの表音能力が、15 世紀にいたって当時のコリアでもちいられていたことばをかきあらわす文字として科学的・合理的にかんがえてつくりだされたハングルの表音能力にはるかにおよばないのは無理もないことである。後にくわしくのべることになるが、この「ハングルの表音能力」が、コリア語から漢字をなくすのを容易ならしめたのである。

■○パッチムの漢字のうち、現代かなづかいで「イ」でおわるものをあげてみるとつぎのとおりである。

米、嬰、影、映、栄、瑛、盈、英、永、泳、詠
……呉音が「ヨウ（ヤウ または キヤウ）」
京、卿、境、傾、徑、慶、敬、経、警、軽、頃、
競、刑、型、形、景、兄、螢、炯、茎、鯨、迎
……呉音が「キョウ（キヤウ／クキヤウ）ま
たは、ギョウ（ギヤウ）」

牲、生、姓、性、星、聖、声、醒、成、盛、誠、
井、征、政、整、正、精、静、清、青、晴、省、
請

……呉音が「ショウ・ジョウ（シャウ・ジャウ）」
亭、停、呈、定、廷、程、鄭、偵、貞、禎、艇、
訂、丁

……呉音が「ジョウ（ヂャウ）または、チョウ
（チャウ）」

寧……呉音が「ニョウ（ニャウ）」

瓶……呉音が「ビョウ（ビャウ）」

丙、併、兵、柄、餅、柄、秉、病、並、聘、坪、
平

……呉音が「ヒョウ（ヒャウ）または、ビョウ
（ビャウ）」

冥、名、命、明、銘、鳴、盟

……呉音が「ミョウ（ミャウ）」

冷、令、鈴、靈、齡、零

……呉音が「リョウ（リャウ）」

■つまり、現代語で「イ」でおわる漢字も古典語ではすべて「ウ」でおわっていたということである。

■このほかに特別なものをみてみよう。

1 「棚」……常用漢字のよみとしては訓よみの「たな」のみであるが、漢字音としては「朋」とおなじく呉音「ビョウ（ビャウ）／ホウ」、漢音「ホウ（ハウ）」である。

2 「行燈」の「行（アン）」……呉音「ギョウ（ギヤウ）／ゴウ（ガウ）、漢音「コウ（カウ）」である。

3 「宮内庁」の「宮（ク）」……呉音「ク・クウ」、漢音「キユウ」の音がある。

4 「供物」の「供（ク）」……漢音に「キョウ」の音がある。

5 「功力（クリキ）」の「功（ク）」……漢音に「コウ」の音がある。

6 「工夫」の「工（ク）」……漢音に「コウ」

の音がある。

7 「年貢」の「貢（ク）」……漢音に「コウ」の音がある。

8 「深紅」の「紅（ク）」……漢音に「コウ」の音がある。

9 「衆生」の「衆（シュ）」……漢音に「シユウ」の音がある。

10 「種類」の「種（シュ）」……漢音に「シヨウ」の音がある。

11 「腫瘍」の「腫（シュ）」……漢音に「シヨウ」の音がある。

12 「普請」の「請（シン）」……呉音に「シヨウ（シャウ）」「ジョウ（ジャウ）」の音がある。

13 「従三位」の「従（ジュ）」……呉音に「ジュウ」、漢音に「ショウ」の音がある。

14 「愛想」の「想（ソ）」……呉音「ソウ（サウ）」、漢音「ショウ（シャウ）」の音がある。

15 「資治通鑑」の「通（ツ）」……呉音「ツウ」、漢音「トウ」の音がある。

16 「登山」の「登（ト）」……呉音、漢音ともに「トウ」の音がある。

17 「瓶（ビン）」……呉音に「ビョウ（ビャウ）」の音がある。

18 「風土記」の「風（フ）」……呉音「フウ」、漢音「ホウ」の音がある。

19 「奉行」の「奉（ブ）」……漢音に「ホウ」の音がある。

20 「塀（ヘイ）」……「塀」は和製漢字。「并」の音をとった。

21 「坊ちゃん」の「坊（ボツ）」……呉音「ボウ（バウ）」、漢音「ホウ（ハウ）」の音がある。

22 「夢想」の「夢（ム）」……漢音に「ボウ」の音がある。

■ここまで、○パッチムの漢字の日本語音は基本「ウ」でおわるという原則にはずれるものはない。

ただ、つぎの一点「庭」のみはこの原則からはずれている。

23 「庭（テイ）」……呉音「タイ」、漢音「テイ」で、「ウ」でおわるよみをみつけられない。

<次回は開音節の漢字（母音でおわる漢字）について>